

私の古典学習法

東京学芸大学名誉教授・本誌編集委員 長野 竹軒 〈後編〉

創作の真髓を得るための臨書をしよう



漢・揚淮表記（ようわいひょうき）の剪装本（せんそうほん）を臨書中の筆者

前号において「書を学習する一般的な順序」（三段階）を臨書学習に当てはめて、臨書は技法を高める手段としては有効としても、「臨書は臨書の為ならず」とお伝えし、さらに枯樹賦の「骨格臨書」、金剛般若經開題残巻の「完璧臨書」など、さまざまな臨書方法を紹介しました。さあざまな臨書方法を紹介しました。今日は臨書学習の三段階の中であえて一つを選んで学習するならどちらのか、また、臨書学習の先にある創作のために古典から学ぶべきものは一体何なのかを述べたいと思います。

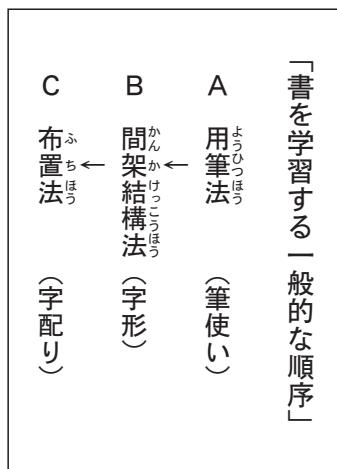
一 古隸を学ぶ二点セットが自分なりの線を形成する

前号の「書を学習する一般的な順序」のA、B、Cの過程（左下、図再掲）の中で最も古

典の技法に近く、古典による差がいちばん出るのは、Aの用筆法（筆使い）になります。その用筆法の臨書学習で核となるのは、古典の線の学習ということになります。前号で述べた空海の金剛般若經開題残巻の臨書学習の目的も、線質をいかに空海に近づけるかとい



写真① 揚淮表記（剪装本）



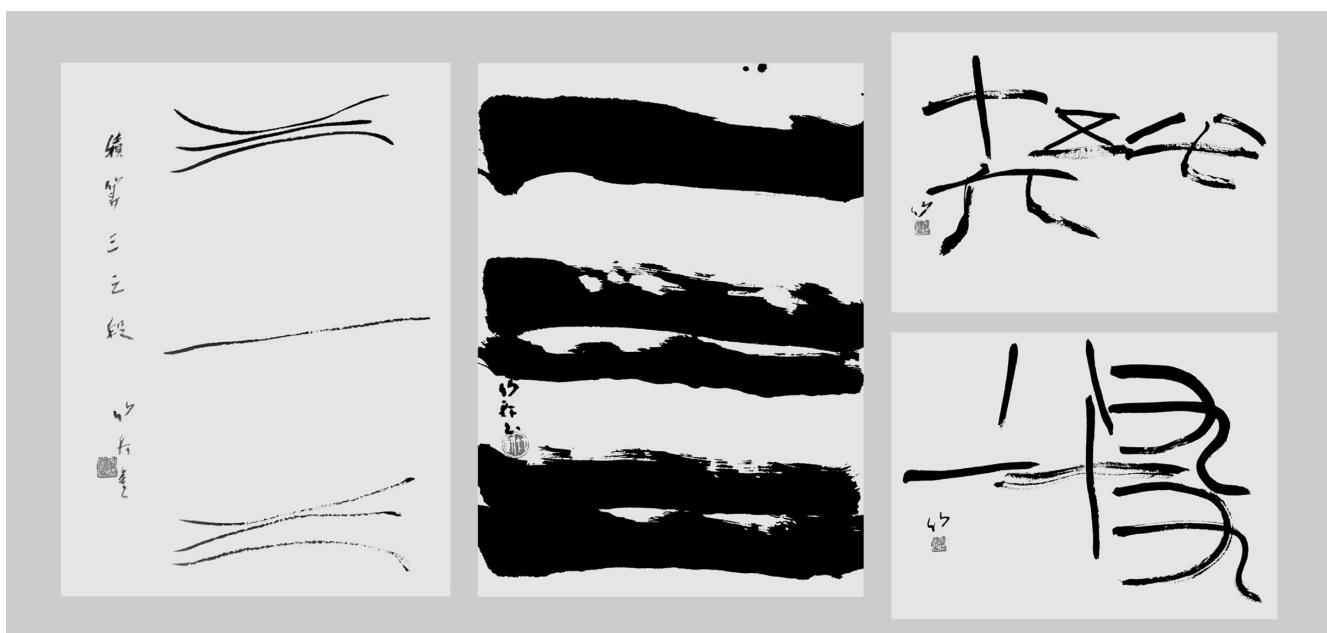
「書を表現する際の書法ベクトル図」

うことだったのです。臨書学習の目的として、古隸の萊子侯刻石、開通褒斜道刻石などは、個人的には揚淮表記と同様に「線の学習」をするのに適している古典の一つだと思います。では、古隸を臨書するのに適した用具はどのようなものかというと、写真③のような長鋒になります。右の3本が長鋒羊毫、左の2本が長鋒馬毛（日本の馬の腹毛）です。

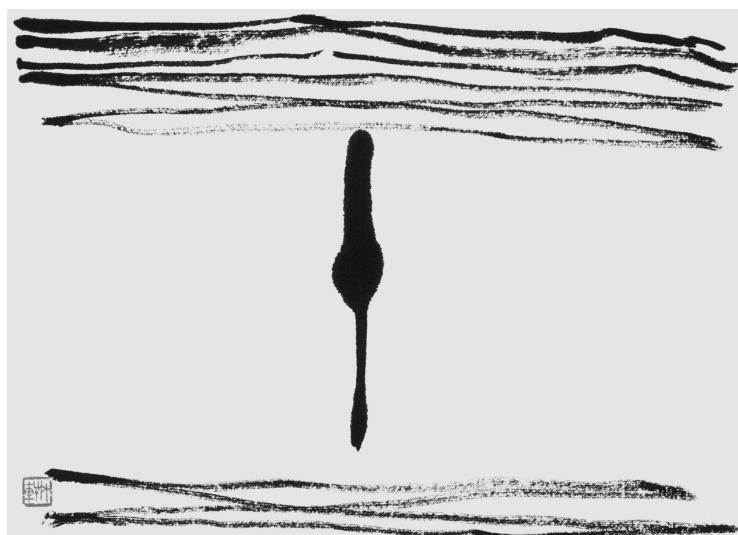
半紙に書く際は、一番右の筆と濃墨と手漉き半紙（表面が柔らかい半紙）の三点セットで臨書をしています。このように穂の長い筆は、直筆と側筆とを明確にして運筆しないと、自分が目的とする線の学びになりません。また、磨崖（まがい）のような、線が明確に見えない古典を長鋒で表現することは、私にとって、一般的に書きやすい半紙用の筆で書くときには感じることのできない、大変楽しく至福の時間となります。古隸を臨書することは、形臨とは違って、自分独自の線を引く中で、線の深さ、強さを体感できる臨書になると思います。

右上「尚書」、右下「侍郎」、左上「上祭」、左下「雄陽」
写真② 揚淮表記（臨書）

写真③ 右3本・長鋒羊毫、左2本・長鋒馬毛



写真④ 九九シリーズ（右上「八七五十六」、右下「九九八十一」、中央「一二二」、左「三一三」）



写真⑤ 九九シリーズ「三五十五」

III 臨書の先にある創作の真髄を見定めて臨書をしよう

※ドローイング＝描画手法の一つで、基本的に単色線画で画面を構成する手法

の楽しさの一つでもあります。これは、古隸をしっかりと臨書し線質を向上させたからこそ、このような表現ができるのであって、まさに「臨書は臨書の為ならず」ということなのです。

私は以前から古隸の学習は、縦画、横画共に直線的な線が多くなることから、掛け算を漢数字だけで表現できないかと思い、写真④のように私なりの「九九」を書いていました。この九九を使用して、以前、東京学芸大学で学生に「九九」を書いていました。というテーマで授業を行っていた際の例を紹介します。ある学生が古隸の線で九九を書くのが難しかったらしく、思わずその学生の道具を借りて参考作品として書いたのが写真⑤です。

「三」は分かるかと思いますが、「五」と「十」は金文の書体の「X」と「◆」です。参考作品として学生に書いたのですが、私が気に入り、銀座で行った個展の際に出品した作品です。このように直線だけで紙面を構成すると、古隸がドローイングアート※へと発展し、現代的な表現に変化するのが創作の楽しみの一つでもあります。これは、古隸をしっかりと臨書し線質を向上させたからこそ、このような表現ができるのであって、まさに「臨書は臨書の為ならず」ということなのです。

II 臨書の線の学習を創作へと展開する一例

で学生に「線の学習を具体的に創作へと展開させるには、一体どのような方法があるか」というテーマで授業を行っていた際の例を紹

生は、「書譜」の書論授業中や作品のご批評をいただく際に、よく、「書には書格というものがある。その核となるのは“氣韻生動”である」とお話ししていました。この氣韻生動とは、素晴らしい芸術作品には気高い風格



写真⑥ 「蘭亭序（神龍半印本）」（臨書）



写真⑦ 「蘭亭序（神龍半印本）」（臨書）（写真⑥の拡大）

や気品が生き生きと表現されており、作品全體に作者の生命感が満ち溢れていっているという意味ですが、このことを伊東先生は「書格」という言葉で示されたのだと思います。たしかに技法はとても大切ですが、作品が醸し出す書格というものが大切だと学ばせていただきました。私が先生の教えを、現在どれだけ具現化できているかは分かりませんが、臨書する際はもとより創作の際にも心掛けているつもりです。

写真⑥は今から数年前に書いた蘭亭序（神龍半印本）の折帖による全臨（一冊目冒頭）です（写真⑦はその拡大）。用具は写真③の右から2番目の羊毛5号で濃墨を使用して表現しました。今、この臨書を伊東先生がご覧になつたら、何とおっしゃるかは分かりませんが、私なりに筆使いや臨書の先にある核としての書格や氣韻生動を意識して表現したつもりです。

読者の皆さんも臨書表現の先にある何かを目指して、日々の臨書学習に取り組まれることを願っています。